

勢州山人『諸国奇談北遊記』紹介

山本和明

はじめに

今般紹介するのは、寛政九年に刊行された『諸国奇談北遊記』四巻四冊である。架蔵する本書を翻刻紹介するにあたって、まず私的な感慨を述べることを、どうぞお許しいただきたい。

本学日本語日本文学科も平成一四年度より募集停止をする。当該学科教員も所属を変更することになる。本研究論集に掲載されるのも、原則としてこれが最後になるのだろう。そこで、これまで研究論集に掲載してきた拙稿の軌跡をたどりつつ、原稿を執筆の際、常に意識していたことの一端を述べておこうと思う。

研究論集では、資料の翻刻を積極的に行ってきた。紙数の制限が設定されていないことは何より有難いことで、これまで掲載したものは次の通りである。

- ① 「京伝『夢のうき橋』紹介」（一九九三年三月・「相愛女子短期大学研究論集」四十巻）
- ② 「千蔭関連資料一・二」（一九九四年三月・「相愛女子短期大学研究論集」四二巻）
- ③ 「一無散人『諸国奇談東遊奇談』—翻刻と解説—」（一九九五年三月・「相愛女子短期大学研究論集」四二巻）
- ④ 「千蔭『新撰月百首』の成立—附・春曙文庫蔵『新撰月百首』翻刻—」（一九九六年三月・「相愛女子短期大学研究論集」四三巻）
- ⑤ 「せきね文庫旧蔵『語意考附歌集』—研究と翻刻—」（一九九七年三月・「相愛女子短期大学研究論集」四四巻）
- ⑥ 「小栗永言『復古四大家譜』紹介—真淵・宣長・千蔭・春海—」（一九九八年三月・「相愛女子短期大学研究論集」四五巻）

- ⑦ 「当世妙々奇談」——翻刻と書誌——（二〇〇〇年三月・「相愛女子短期大学研究論集」四七巻）
 ⑧ 「奥州道中記」——翻刻と解題——（二〇〇〇年三月・「相愛女子短期大学研究論集」四八巻）
 ⑨ 「勢州山人『諸国奇談北遊記』紹介」（二〇〇二年三月・「相愛女子短期大学研究論集」四九巻）

なにを翻刻し、紹介するかという問題は、常にそれをなす者にとって意識的でなくてはならないと思う。意味ある翻刻ということ、これに尽きる。自身、意識していたことの一つは、自分の論文を補うものとしての資料という面である。①③⑦がそれに該当する。

①は拙稿「夢の憂橋——永代橋落橋一件始末——」（『国文論叢』第一九号）の、③は「京伝『復讐奇談安積沼』ノート」（『相愛国文』第八号）の、⑦は「叱られし人々——『当世妙々奇談』私想——」（『相愛国文』第二三号）の論旨を補う資料としての側面が大きい。論じるということは、何かを主張することであり、そのために資料を呈示するに他ならない。論ずるに用いた資料本文すべてを、そのままに提示するには紙数の制限もあり、また却って論旨がぼやけてしまうくらいがある。ために、断片的な提示と成らざるを得ないのは仕方がないのかも知れぬ。ただ人文科学といえども、用いられた資料は常に検証可能なものでなければならぬと思う。かつて典拠研究盛んなりし頃、Aという資料が、B作品の典拠であるという主張、いわゆる典拠研究が広くなされてきた。だが、いざ追検証をしてみると、B作品冒頭の、慣用句的文章のみに言える場合であって、果たして典拠と言いつけるのか、また本文全体に関わる重要なものと言えるのか、疑わしい例に多く遭遇したものである。さらに、用いられた資料そのものが希有な場合なども多く、その場合、尚更検証は困難なものとなる。できるだけそうしたことを回避することに意識的でありたいと願うのである。補助資料として、ただ単に翻刻をするだけではなく、何か研究の発展に繋がるようなことを明らかにしておくこと。そのことも常に心がけてきたつもりである。

加えてもう一つ意識していたことに、資料を所蔵するものの責任ということがある。本学には「春曙文庫」という貴重資料を収蔵する文庫がある。枕草子の古写本を中心とした文庫だが、関連して近世期国学者に関するものも多く収蔵されている。個人の所蔵の場合とは別として、大学という機関に収蔵された以上、そうした資料は、けっして死蔵させるべきものではなく、また出来るだけその存在を公にし、研究の進展に役立てるべきものと考えられる。個人所蔵の場合、世代が変わるとか様々な事情で、流通する可能性が残さ

れている。自分の研究のためといって、無理強いをして見せてもらうのは横柄というもので、次世代あるいはその後に託せば良い。資料を用いた研究とはそうしたものだと思う。

だが大学などの機関に収まった資料は、原則として資料の流転は望むべくもない。その大学が存在を公にしない限り、永久に目のみないこともありうる。大学に勤め、その資料の存在を知る者として、なんらかの形で紹介することも所属教員として意味ある行動と思う。④⑤⑧がそれに該当する。私自身、近世後期の戯作者山東京伝と和学者加藤千蔭との関わりを考えてきた関係で、本学に収蔵される④⑤を意味ある資料と考えた。⑧は平成十二年度秋季に本学で開催された日本近世文学会で展覧。「おくの細道」を考える資料として意味あるものと考えての選定だったが、幾人かの研究者から、翻刻を望まれたことが大きい。研究に役立つことは望外の喜びでもある。

同じことは私の場合、架蔵本の翻刻紹介にも通じている。③⑥⑦⑨は、その資料的な意義を考えてのことでもある。特に⑦は著者自筆本であり、意味あるものと考えた。③⑥⑨は版本だが、ともに最善本と目される。うち③⑥は先に示したように拙稿の補足であり、かつ他の研究者にとっても興味ある資料と考えたからである。

翻刻をした資料を通じて言えることに、②④⑤⑥は和学、とりわけ千蔭に関わる写本が多いということが分かるかと思う。和学と戯作の関わりは、意外なまでに深く根ざしたものであり、そのことを述べたい衝動にかられている。特に、千蔭やその弟子と京伝等戯作者との関わりに関してまだまだ考えるべき問題が多い。その一端は「京伝と和学―戯作者―側面―」（「江戸文学」一九号）に示しているが、論じるとともに、和学に関して、まだまだ基礎的な資料の整備・調査を先行してなされなくてはならないとの思いを抱く。「時宜」ということがある。研究を進める時、先学の恩恵に浴してきた自身を思うとき、そうした資料の整備も重要であると思うからである。そのこと自体、問題も多いのかも知れない。しかし、資料を伝えていく存在としての研究者の意義もあるはずである。今般、こうした発言をするには、昨今の翻刻隆盛の状況があるからに他ならない。翻刻を廻る発言も幾人かの研究者によってなされている。どういう翻刻姿勢であるべきか、なるほど考えなくてはならない問題である。ただもう一つ、何を翻刻対象とするのか、という点も重要なのではないだろうか。商業ベースにのらない資料は、必要がないのかという皮肉まじりの発言もしたくなる。

情報が刻一刻と増え続けている今日においてなお、時として同じ作品が繰り返し翻刻されている。その労力を別の作品に費やしてほしいと願うのは、何も私だけの思いではあるまい。何か付与される情報があるのなら別だが、そうでもない場合も多い。誰が読者として読むのかを配慮するとき、商業ベースにのせるほうが良いか、紀要に掲載し、必要とする人に見て貰うのが良いかも、どこか念頭におきたいものである。かく云う拙稿③の翻刻本文も、別の人によって五年以上を経て翻刻されたことがある。重なって翻刻することは、それほど広くない学問領域のなかで、避けられぬものかと切に思う。

繰り返しになるが、なにを翻刻し、紹介するかという問題は、常にそれをなす者にとって意識的でなくてはならない。様々な思いが錯綜しつつも、そうした意識を、持ち続けたいと今は強く思っている。自戒の念を込めて。

『北遊記』について

さて、本題にうつろう。今回翻刻する『諸国奇談北遊記』は、寛政九年に刊行された「諸国奇談」モノの一つである。山東京伝が『東遊奇談』を利用したことについては、既に論じたが、近世戯作者にとつて「諸国奇談」モノは、地方の情報を入手する一次資料的な側面があったと思われる。『北遊記』がそうした一次資料たりえたかは今後の課題だが、何よりもその内容には興味を惹かれる。架蔵本巻之三見返しに「此本鼠之喰様奉希候」との書き入れがなされている。「鼠之不喰様」なら、貸本屋による読者への警告の文としてあり得るが、ここは「鼠之喰様」とある。何故「鼠之喰様」なのだろうか。

その内容を閲するに、勸懲、因果譚としての色彩が濃いことが分かる。例えば巻一「人の火」は、夫の死後、淫婦が姦夫と焼死することを述べ、巻二「本妻の霊」は、本妻を讒言した妾が、其怨念に取殺された話である。淫婦・姦婦の話は先行する仮名草子などにも見いだせるものであり、聞き古した話とも言えるが、そうした話を含む本作に対し、如何に読者は反応したかが同え興味深い。

また、異類婚姻を匂わせる話にも注目できる。巻二「犬の恋慕」は、母親が、戯れに飼犬に対し娘を娶すと言った詞を、畜生ながら心に刻み、成長して娘に執心をかけ、娘も他に嫁すときは病に臥した事を記している。まるで「八犬伝」を彷彿とさせる設定であ

り、こうした話の存在こそが「鼠之喰様奉希候」という発言に繋がるのだとも想像できよう。巻四「尾形三郎が事」は、勇士尾形三郎の生ひ立ちを述べたもので、とある少女が、夢の中で美少年と結ばれ妊娠したが、少年は実は大蛇の化けたものであったという話である。いうまでもなく「古事記」に載る三輪山伝説に拠る話。三輪山式神婚説話（蛇婿入）の古伝は、九州豊後地方に存在し、『平家物語』巻八「緒環」の条に「緒方三郎」の名で登場する。『北遊記』巻四に「附録」として掲載された本話は、元をたただせば『平家物語』に行きつくというのである。本書の説話の成り立ちを考える上でも興味深く思う。

各話冒頭に地名を掲げるといふ点からみても、加・能・越地方の奇談集『三州奇談』の内容と、『北遊記』の内容とは全く交錯していない。即ち、本書が実際の伝承を収集して成り立つ奇談集ではなく、「尾形三郎」にみるように、先行する様々な説話の地名を、加・能・越地方の地名に置き換えるといった方法も取られ、集められた奇談の集だと言えよう。他にも、例えば巻二「蛇含草」は、落語「蛇含草」（別題そば清）としてよく知られた話であり、寛延四年『開口新語』や寛文十二年『一休閑東咄』上巻「大食はなしの事」などにみることができると、同じく巻三「阿弥陀峠」にある、狸が三尊に化けるといふ例は『一休咄』巻三「蜷川新右衛門末期に化生を射る事」にも確認される。

水谷不倒が「決して拙い作とはいはれぬ。」と評するように、その文面はなかなか読み応えのある本書であるが、分からない点もまだまだ多い。

まず著者であるが、本書巻三末尾に「右、日々坊享保日記、北陸杖の跡に載たる事跡、今あらためて梓にちりみむ。末の巻は余が聞おけることを記し、合せて好画の人に告るものなり」とある。その云うところは巻一から巻三までは日々坊記すところの「享保日記」「北陸杖の跡」から「余」こと著者勢州山人が写し取ったもの、巻四は勢州山人の聞きおいたことを記し、版行したものである。日々坊は何人か不明。勢州山人もまた同様である。勢州というのだから或いは伊勢国出身であろうか。

その成立に関しても気にかかる。序文の「丙子孟春」とは宝暦六年（一七五六）のことであり、刊行された寛政九年（一七九七）との間に四〇年もの隔てがある。「これよりさき西東の遊に有て既に刊行すといへど」と序にあるが、橋南谿による『東遊記』『西遊

「記」が刊行されたのが寛政七年（一七九五）であることを併せ考えるならば、序文の「丙子孟春」の表現は問題が多いのではないだろうか。挿絵の配置が本文に即応しておらず、本文も性急に整えたような面もみられ、割印帳にも見いだせない。「江戸書林 橋本忠蔵」とあるものの、あるいは素人出版のたぐいによる性急な制作であったのだろうか。

ところで序文をみるに、神仙思想の影響をみる表現がいくつか確認される。とすれば、題名にみる「北遊記」に、「八仙東遊記」の影響をみることは少なくとも許されるのではなからうか。中国明代における八仙の伝説を集大成したものととして、呉元泰の記した「八仙東遊記」があり、そのダイジェスト版として「西遊記」、「北遊記」、「南遊記」といった書が中国で刊行されていた。それになぞらえての書名であると、少なくとも序文を記した睦譚主人はみていたものと思われる。

その挿絵も独特の雰囲気醸し出しているのだが、架蔵本には巻之一冒頭に「山中記齋画也」との書き入れがあることを今は指摘しておきたい。ちなみに架蔵本は、天保期の画家原在中旧蔵本である。

* * *

以下、底本とした架蔵本の書誌を略記しておく。

○体裁 半紙本四卷四冊（春・夏・秋・冬） 縦三・二糎×横一五・六糎 楮紙

○表紙 靛色無地

○題簽 沈香茶色原題簽。左肩子持梓（一七・〇糎×三・四糎）に「諸国／奇談 北遊記 春（夏・秋）」「諸国／奇談 ほくゆうき 冬」

○内題 「北遊記卷第一 勢州山人」「北遊記第二」「北遊記第卷三」「北遊記第四附録」

○刊記 「寛政九巳年／正月／江戸書林 橋本忠蔵」（二部欠落。国会本によって補う）

○備考 蔵書印「多可屋文庫」「青栄堂道知」「臥遊山房（*原在中蔵書印）」各印。巻之一序冒頭に「山中記齋画也」との書入有。

『国書総目録』『古典籍総合目録』に随えば、寛政九年版は国会・茶女大・高木・和歌山大紀州藩に、寛政十一年版は国会・京都府・今治河野美術館に所蔵される。架蔵本以外で披見したのは国会図書館本二点（請求番号一八八―二〇七・二二九―合一―一〇六）である（以下、それぞれ国会本A・国会本Bとする）。

国会本Aは大惣本で、合綴一冊。表紙は初めと終わりにのみ存在。題簽からみて「冬」の巻の表紙を利用か。巻末刊記に「寛政九巳年／正月／江戸書林 橋本忠蔵」とある。

国会本Bは二冊に合綴されているが（春夏・秋冬）、巻ごとにそれぞれ表紙を伴う。題簽は無地。刊記に「寛政十一乙未年／正月／書林 橋本忠蔵」とある。初版版木の「九」から「十一」に、「巳」を「乙未」に替えて埋木している（未のみを入木か）。また「江戸書林」の「江戸」を削っている。その他は変更がない。「江戸」を削っている点など、素人出版まがいであったことの表れであろうか。

以下、翻刻本文を掲げることにする。

〈凡例〉

*翻刻に際し、適宜句読点・濁点等を補った。

*その使用文字に誤りも多く、漢字は適宜判断を下して通行の字体を用いるよう心がけた。

*底本には架蔵本を用いた。但し奥付が一部欠落しているため、該当箇所は国会図書館本によって翻刻をしている。虫損箇所も国会図書館本により校合した。

*挿絵の配置は、本文中に【挿絵】とし分かるようにした。

*本文中に、今日からみれば問題の多い表現も存するが、研究資料としての立場からそのままとしたことを付記しておく。

「北遊記」本文

北遊記序

天に登り地に入り、上下のおき路を寝る。神仙の境趣にして寝言の余瀝也。東西を遊覧し南北を眺視するは風才の所為にして、しかも此中に実教を存す。これよりさき西東の遊に有て既に刊行すといへども、今だ北遊の興趣を催すはなし。亡先生艸鞋の疲れをいとはず、胼胝のいたはりを省ず、少祥の嵯峨を搜り録する所の者少からず。豈唐人の遊色山記明人の題跋録り取ん乎。梓に鐫に臨みて、序を予にもとむるは一言の尅万古の神にならずらふもの歟。何ごとを惜せ、しかなりとせんや。

丙子孟春

睦譚主人趣

北遊記巻第一

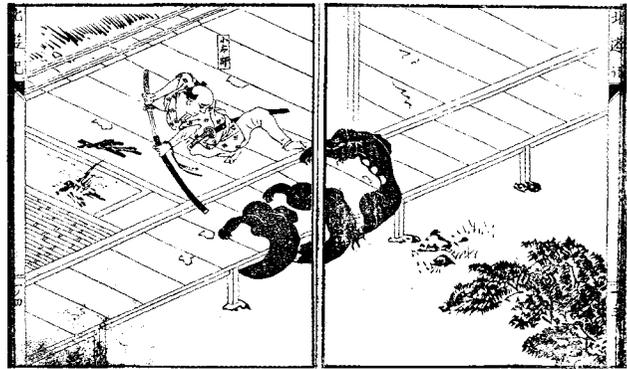
勢州山人

隅田小太郎勇力

佐渡の国へまかりけるとき、見付嶋といふ所に廿日ばかり杖を留めけるが、此処に隅田小太郎といふ郷士あり。其生質さのみ勇猛にもみへず。力も人に勝れたらんやうには見へざれども、里人のいふには五十人力はあらんといへり。四五五年の

前、此小太郎が近処に儀左衛門といふ大福長者あり。歳五十ばかりにして、家を其子に譲り、妾と季の娘とをつれて其近き所に隠居しける。此隠居屋敷といふは、四方に堀ありて、三方に橋をかけ、要害甚よし。二百年來荒果て、むかしは何者の住しといふことも知れず。儀左衛門、金銀もおほければ、盗の要心にもよきとて石垣を築なをし、石橋を掛かへ、塀など奇麗にぬり立て、下女下男六七人ばかり召仕ふて住居けるに、半月ばかり経て、此娘何となく瘦おとろへ、食事も常のごとくにす、まず。季娘なれば、儀左衛門とりわきて寵愛せしほどに、国に名高き医者をもかへてさまざま療治を加へけれども、次第く元氣よはりて、薬の功もなかりければ、一門の人々も昼夜入かはりて看病し、或は巫山伏を迎て祈念などし、何ともして助けばやと心を尽さざる人はなかりける。爰に三原の南光院とて見通と呼る、八卦の名人あり。儀左衛門、此南光院にたのみて娘の病をうらなひけるに、屋敷にあしきものありて祟りをなす。いそぎ屋敷を替ざれば娘ばかりにあらず、家内のものみな祟をうくべしといふ。されども此屋敷へうつりていまだ半年も経ざるに、みなくうちつれて本家へ帰るも外聞あしきことなればとて、儀左衛門は介抱の籠末にもあらんことを気づかひて、娘が病氣勝る、ま

で本家へ帰りて、跡には妾と下女、下男ばかり居ける。儀左衛門、娘をつれて本家に帰りければ、明の日より娘は食事につきて薬の験も見へ、医者も十か九つ氣遣なることは有まじといへば、一門の人々も大かたならず、喜びあへり。然に其明の日、妾下女下男とも夜の明るを待かねて皆く、かちはだしになりて、本宅へにげ来り、隠居へは惟もの出て一時夜妾を魔ひけれども、是は介抱のつかれにて病ならんとおもひ、噂にもせざりけるが、夜前は下女・下男ともに魔はれて夜の明るまで少も身うごきならざりし、恐しきことなりといふ。儀左衛門も大に驚きて扱は南光院がいひしこと少もちがはざりけりと、其日隠居の諸道具を本宅へ運ばせ、皆本宅へぞ引とりける。隅田小太郎此やうすを聞てあやしきことにおもひ、儀左衛門が宅へゆきて妾并びに下の男などに委しく問ければ、二夜ともに四つ時より大なる坊主とみへて、何所ともなく入来て寝たる人の上へ乗かゝりぬれば、磐石にて魔るゝがごとく、声を揚んとすれば、口を掩ひて息すること能はず。【挿絵】五躰すくみて動ことならず。おりくくさき息をふきかけられて鼻に入れば五臓にしみて酒に酔たるごとくになり、後には根もつきはて、前後を覚へ候はずといふ。小太郎は兼て柔術に達し殊に勝れし大力なれば、片はらいたくおもひ、



是かならずきつねたぬきなどのしはぎにてぞあらん。某其実を見届参らせんと其夜したゝかに用意して彼屋敷へゆき、ひとり囲炉裏に火をたきて今やおそしと待たりけり。夜もはや四つを過けれども、虫のこゑのみきこへてあやしきものも見へざれば、扱は、彼らが恐しとおもへる妄想にて惟ものと見へたるならんとおもひ、炬縁を枕にして少し眠らんとするころ、小太郎が足をむず掬へるものあり。得たりや奨しとがはと飛おきれば、其長老丈ばかりの黒き坊主六人、小太郎を目がけてとびてかゝる。心得たりと刀を抜て、無二無三にきり付れども、しなへを以てうつがごとき音して少もきれず。突んとすれば、はや後よりしつかと抱き刀をもぎとり両の手にとり付て組伏んとす。小太郎一生の力を出してもぎはなしやはらの当身を碎け

よとあつれども豎たみたるふとんに当るごとく、少もひるむ気はなければ、流石さすがの小太郎恐おそしくなり逃にげんとすれども、四方より取巻とりまきたればせんかたなく既に危あやうふく見へたる所に、儀左衛門は小太郎がごと心えなく、家来に弓鉄砲てつぽうなどもたして見せに遣はしけるが、門前かどまへにて門のさはがしきを聞ておそれて入ものなく、かの鉄砲を二つ三つつ続けて放しければ、此おとに驚おどきて恠ばいものは消くうせけり。小太郎は力を得て急ぎ飛て出しかく、のよし物語で、さても恐しきばけものなりと舌を巻いて其夜は帰りけり。小太郎つくくおもふに彼かげ物のからだの甚おほ泥どろくさかりしは必定ひつめい堀ほりのなかにかくるゝものと覺おぼへたり。此儘このままにて捨すおかんも面目めんぼくなきことなりとおもひ、此よし儀左衛門に告つげれば、さらば堀ほりをさらへて見よとて近郷きんきやうの若者わかども数十人を雇やとひて息いきをもつかせずさらへけるが、底そこに一つの穴あなあり。泥どろの深ふかきこと三丈さんじやうばかり。これぞ恠ばい物のすみか疑うたがひなしと銘めい々々力ちからのかぎり堀ほりたてける程ほどに、泥も浅あくなりて今五尺いまごふちばかりも有ありとおもふころ、泥中どろのなかにて動うごくものあり。さらばこそ突殺つせつせよとて鯨くじらをとる森もりといへる矛ほこの如ごときもの三本さんぼんを以もつて無二無三むにむさんに突つければ紅べにの如ごとき泥どろわきあがること甚多おほし。若ものどもいさみをなし、泥をかき上あて底そこをみれば長さ六尺むさふちあまりの蚯いもり二疋ふたひきを突殺つせつしたり。其下に又四疋よひき潜ひそみ居あた

るをことかく突殺して皆海中へ捨ける。一疋の重おもさを千木ちぎにてためしけるに式拾壹貫目ありけり。扱おさ其後そののち試こころみに大勢おほ彼屋敷かに泊りけれども、何のあやしきこともなきゆへ、又隠居の家として儀左衛門うつりて住居す。小太郎がこと佐渡一國にしらざるものはなし。誠に勇猛のおのこにてぞある。

猿太郎右衛門が猿

猿太郎右衛門は同じき国のいやしきあきんどなりけるが、本手ほんてつきてせんかたなく一つの猿を畜かひ、街道かいだうのかたはらに薦こをもつてすみかをいとなみ、昼ひるは道辺りへ出でて猿を舞まはして、往來ゆきの人の銭ぜにをこひ米こめなど買かひ、余あまれば酒さけを買かひて猿とふたりさしむかいて飲のみ、親子おやこのごとく親したしみければ、人みな猿太郎右衛門とぞいひける。後に太郎右衛門、中風ちゆうふうの病びやうをうけて小屋こやより出ること叶はず。今は山へ帰るべし、我はかゝる病をうけたれば、生いてありても却かへて苦くるしみなれば、此儘このままに飢うて死しべしといへば、猿なみだを流ながしかぶりふり、必ず養やしなひ申まをさんとしかたにておしへければ、太郎右衛門も涙なみだにむせび、其志こころを感じける。扱おさ猿はこれより只ひとり道辺みちべへ出でて、行來ゆきの人をみれば芸げいをして一銭ひとせんを乞こひ、じんたいよき人とみれば、袖そでにすがりて小屋こやの病人びやうじんをさしおしへなみだを流ながしてあはれ



みをもとめければ、鬼ならぬ人其貞節に感じて、或は百二百の銭を与ふるものあれば、猿よろこびて其人のかげみゆるまで伏おがみ、かの銭をもちて町へゆき、酒餅など買ひ来りて太郎右衛門に与へけるほどに、後には町家の人も感じて、食物など与へおくるもの甚多く、太郎右衛門は健なりし時よりもゆたかに月日を送りけるに、三年の後、寒気に閉られて終に空しくなりければ、猿悲しむことかぎりなく、初より用意をやりたりけん、或は

此時人の与へたるにや、
 言歩三つをもちて棺を買ひ、
 銭を出して人をやとひ、
 寺へたのみて葬礼の儀式をいとなみければ、
 人皆これが為になみだを流して、
 我もくと往て葬りを助けるほどに、
 直に石碑までを建たりけり。
 さて葬もすみければ、
 猿は小屋【挿絵】へ歸りて
 太郎右衛門がおきふし

自由ならざりしゆへ、きたなきものどものありしを、ことかく道のかたはらへもち出て小屋を崩して其上にかさね、跡をばきれいにさうちをして、さて火を求めてかのかさねたる物にたきつけ、火のさかんるとき、飛入て焼死ける。これを見るもの、みな其子の死たるを悲しむがごとくなりしとぞ。今に至て其所の人むごきよめ子をみれば、猿のたとへを引て喩すよし。是また奇なることにぞある。

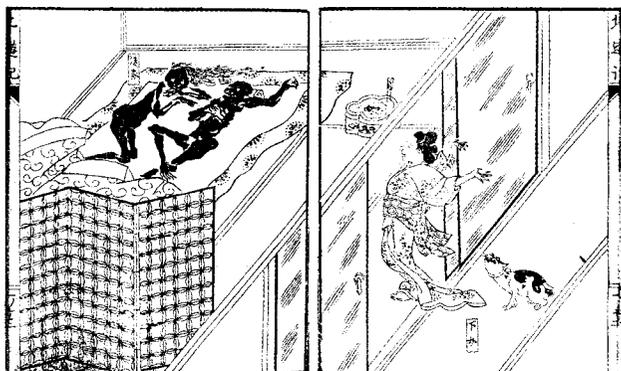
人の火

越後の長岡の東沼田といふ所に彦左衛門とて稍ゆたかに暮したる人あり。十年ばかり前に彦左衛門身まかりて其子彦六が世なり。然に彦左衛門が後家、甚淫乱にして、召仕ふ者は勿論出入の商人近隣の若者ども誰をも撰はず、日暮れば、おのれが部屋へ引いれて外聞も構はず、子の手前をも辱ず、放埒の身もちいふばかりもなかりけるが、或とき夢に彦左衛門わかくとしたる顔色にて、我は死たれども魂魄の消ることはなきを放埒のふるまひにがくしきことどもなり。然れども彦六いまだ若年なれば、何とぞして家の繁昌せんやうにと、口惜きことをば幾たびか堪忍したり。其うへ姪は火なり。これを過すときは水つきて火さかになり、終に命を亡ぼす

ことあの世よりみれば能知れること、碁石の白黒をみるが如し。其方の水、既にかれたり。今より慎しまずんば、命は今年をこへず。左あれば、一子彦六がこと、心えなさにいゝきかせおくなりといふ。後家はとかうの返答もなく恥入て声をあげ啼ければ、夢はさめたりけり。後家一月がほどは心にはぞて慎しみけれども、ふるき名染にあひては心うごき、酒ごとの上にてはおもしろさにひかれて心のちかひもうち消して、一夜なじみの男と宵より臥けるが、朝五つ半時までも起ざれば、下女その部屋へゆきみるに、嗅きこといふばかりなし。戸を明れば、弥臭くして堪がたく、能々見れば、二人ともに焼て灰となりたり。着たる夜具も敷たるふとんも其儘にて、人のからだばかりぞ焼たりけるは、誠に欲火の人を焼といふこと疑もなきことなりと其処の人かたり侍き。

陰悪の報

同じき国蒲原の郡白子村に八左衛門とて、身代もよく、若き時には諸人の氣に入て八左衛門ならではみつゝのことは談じがたしと人に信ぜられ、少きあきんどより立身して、今は誰あつて肩を並るものもなく、さかんに暮しけるが、六十五六の歳より老耄して何所ともなく出あるきけるゆへ、一間に



おしこめて三四年ばかりも外へ出さゞりけるに、或ときいふやうは、我若き時人の妻になじみ其亭主をだまして金銀を多く盗み出し、其亭主知て上へ訴んとしけるを、女房より告げれば、其時我は上下ともに律義にして発明なりと知られけるゆへに、いそぎ手を廻して彼亭主が日頃なきことまでも女房の告るを幸に讒言して悪人なりと告おきしかば、亭主が申所甚不届なりとて罪におとされ、又おのれが隠したることも女房よりあらはれしとは露知らず、少しは心におもひ当ることもありしにや、終に明らむることあたはずしていきどほりをいだきて死たりしかば、

彼はいよく悪人といはれ、あしきことをしたりし我は、ますく善人ともてはやされて、彼後家といよくふかく交りし故に、此身代にもしなしたり。近きころは彼亭主

やはり我はらの内【挿絵】へ入て五臟六腑を食傷り、其堪がたきこと口にもいひ尽しがたし。急ぎ此家をあげわたし家内みなはだかにて立退なば、子孫もつゞくべし。左ならんは伝尸病となりてことかくとり殺さるべし。いかなることにも是ばかりはいふまじとおもひしが、今は既に死ん期の来りて子孫のたへんとする悲しきに斯はいふなりと高声にいゝて命は終りけり。其家まけおしみて家をも出ず、巾ひをもせざりしかば、三年の内にみなく死たへて屋敷は蛇のすみかとなりし。陰悪のむくひの程ぞおそろしきことなり。

白子山の仙女

同じき国魚路の南猿峠といふ所に才三郎といふ者あり。近き所の娘とふかく契りけるに、隣に後家ありて深くねたみ、何ともしてふたりが中を隔、才三郎をばおのれが隠しおとこにせんとたくみ、女の智慧のおそろしくも、平生心易き人とかたらい、才三郎が親にさまく悪口し、又才三郎はうわきものにて、すじむかひの女房と密通したりといひふらしければ、かの女房もふしゆびとなりて家内もおもわしからず。才三郎はりちぎなるものにて彼娘と忍び物い、かはすこともなく、父母によくつかへければ、後には人もかの後家が悪心なるこ

とを知て、才三郎をいたはりける。然るに彼娘いつとなく病つきて半歳ばかりありて終に身まかりける。才三郎心にふかく悲しみて、深き契を世間の義理にかへて返つて人のいのちをうしなはせけるもうきよのならひといひながら、不便なること、わが身を殺よりもせつなくして是も病となりて半年ばかり療治しけれども、素より心にある病なれば、薬のいやすべきにあらず。同じき国の白子山の明神は靈験新なることなれば、我が情なきにあらざりしとを此神に告て彼が冥途の怨をも散せんとおもひ立て、父母にいとまをこひて彼山へぞ参詣しける。彼山と申は謙信無双の要害とたのまれて、屏風を建たるがごとく聳へてなかく登るべふも見へず。半峰は鉄の鎖をかけてすがりて上り下りするほどの所を、才三郎終に登りて上をみるに、明神の社のあたりに甘ばかりの女、物まつふりにてたゞずめり。因て急に絶頂に登りて彼女をよくくみれば、ちぎりし隣の娘なり。娘もよくぞはやく来り給へり。今朝より待わびたりといふ。才三郎いよくふしぎにおもひ、いかにして此処へは来り、又某が来ることを知たるぞと問ふに、死るは夢のごとく魂はきゆることなし。此山に天女ありて天の姥といふ。死たる日、迎ひの人来て、みづからを伴ひ帰れり。夜前かの姥のいへるはあすは汝が深くおも

ひし人にあふなるべし。明神の社のあたりへ出て待べしといへり。されば外にはなし。御身様ならんところ思ひて早朝より待居たり。こよひは自らが庵へ伴ひ奉らんと、それより急ぎ岩かどをつたひて半町ばかり行ければ、奇麗なる庵ありてさまざまの花木を植て虎狼のたぐひを門番として、其辺りには恐しき龍蛇のたぐひ多く臥居たり。仙女才三郎を伴ひ内に入て、酒肴など出して過ごしかたのことをも物語り、或はうらみ或は喜びぬること平生に異ならず、夜もはや深ければ、同じしとねにうち臥て今ぞはゞかり恐るゝ所なかりけり。然るに才三郎はうれしさのあまりぼんのふおこらんとすれば、虎狼龍などの声すさまじく、俄に恐しくなりて其志しきへうせ、只何となくうち臥ば、只松風のおとのみして龍虎のこゑはやみけり。夜も明れば神女涙をながし、そなた様はいまだ人間の縁尽されば留めおくこと天帝への恐れあり。是より御別れ申べしとさめくゝと泣ければ、才三郎もとかふなくふかく悲しみけるが、山の上に鐘のこゑ聞て一山震動すれば、神女才三郎をいだきて是より帰り給へと山のきしより突落しければ、才三郎蘇りてけり。死して二日めなりしとぞ。それより病氣平癒して今に健なりと国の人かたれり。

一終

北遊記第二

玉香姫の棺

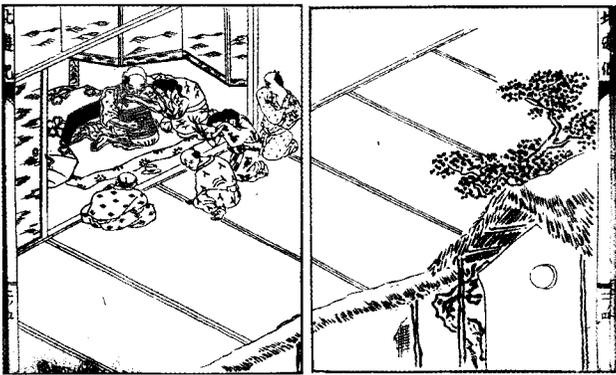
越中の国立山の麓に鳴海村と在所あり。二十年ばかり前に、此村の左平次といふ者、山より帰るき、道をうしない日も暮ければ、せんかたなく谷川辺の石に腰うちかけ、立山権現へ祈請をこめ、何とぞ道の有所を知らせ給へと誠を尽し祈りければ、腰かけたる石の内より此谷川にしたがつて出れば一町ばかりにして道あり。其道を南へ出れば汝が家ある所へ出るなりといふ。左平次驚きながら是ぞ権現の御知らせなりと頂礼して後日の印にと腰なる鎌をかの石の上におきて、さて教のごとく出ければ、果して道あり。其道を一丁ばかり出ければ、村人大勢松明をふり立て尋ね来れり。左平次帰りて、しかくのよし物語ければ、村人奇異のおもひをなし、其翌日大勢うちつれて彼石を尋ねけるに、三里ばかりの山奥の谷なりけり。人々尋ねあたりてよくくみれば、石のから棺なり。其上に玉香姫の棺と篆字を以て書たるさま、古なることいふべからず。さて蓋をひらきみるに石とも玉とも見へざる像あり。其背に二首の歌を彫たり。この頃は汲てぞ知らん山の井のあさくふかきを人の心に、へたをやめの姿となみぞ色も香もしる人ぞしるちよの後は、へ方代に我たまの香

の消はこそ此しき嶋の道のしほりに 是より村人此棺を祭り
て祠を建、毎年祭礼ありてにぎくしきことなり。

礪波の幽霊

同じき国の礪波山は、源平の古戦場にして険しき山にて平生
人の往ことまれなり。曇りたる日或は雨天などには、かなら
ず幽霊出て人をなやますことありとぞ。大いその吉六とて
大胆不敵の男あり。或ときかの山に入て藜草をとりけるに、
黄連多くあり。吉六悦びて日の暮るもしらず、採けるが、凡
そ百斤ばかりもあらんとおもふ程を一荷にして帰けるに、道
に迷ふて深き谷へ入こみ、日も暮て東西を弁へず、如何せん
とおもふにはるかに燈火の影みえて、人里あるやうなれば、
何さま火を求めんと黄連をばうち捨て岩角をさぐり、つたな
どを便として行ほどに一つの村へ出たり。奇麗なる家へ立よ
りて、火を請求めければ、内に女の四五人も居るていにて、
吉六をあやしみ、いぶかしく有さまにて、一人の女出迎へて、
何方よりぞと問ふ。音六しかくのよしい、入ければ、女驚
き、さてく能も此所へは来り給し。是より帰り給はんは
難所多かれは、一夜をあかして帰り給へといふ。吉六も空腹
なり。殊に草臥たれば、さらば一夜をかし給へと内に入てみ

るに屏風・襖のたぐひ皆奇麗を尽し、五十ばかりを上として
五人の女住居たり。其二十四五の女をよくくみれば、三年
以前に死たる隣村の長者の娘なり。娘も吉六を見て驚きはち
たるていにて一ト間へ入けり。吉六心におもふやふ、是は全
く人間の住居には非ず。油断すべきに非ずと心をゆるさず、
食物など出しても食せずして臥て寝たる躰にて気をつけける
うちに隣より人来て時刻はよいざ、せ給へといふ。家内皆
うちつれて出けるに、
ことかく剣をさして
出けり。かの吉六が知
たる女、しばらくして
あはたゞしく帰り、吉
六をゆすりおこし急ぎ
此所を出て南の方をさ
して逃給へと、戸口を
押出しければ、吉六も
気味わるく、女が教を
幸に南をさして無二無
に逃けるが、一つの山
石の高く聳たる所にて



跡を見返りければ、雲の色真黒になり忽ち雷電して大雨しを束ぬるが如くふり来る故、片はらの松の茂りたる下影にて雨をしのぎけるが、忽ち雲はれ雨やみて、夕日西にかゝり鳥のこゑ遠近にひゞきて、いまだ日は暮ざりけり。ふしぎにおもひてよくくみるに平生行ける山なり。堀たる黄連はかたへにありて何方にて堀たる所も知れず。其近辺を尋るに黄連は只一本も見へざりけり。吉六ふしぎのおもひをなし、我家に帰りて夫より此山中へはゆかざりしとぞ。【挿絵】

〔無題—*山本補〕

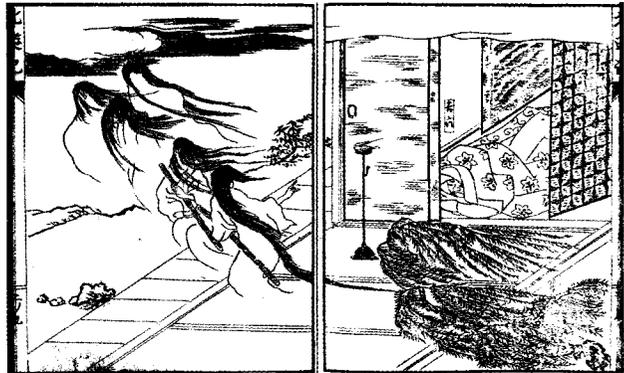
同じき国八丈といふ所に鶴の松とて名高き松あり。枝のながめ十五間ばかりもあらん。根の大きき丈六尺四寸あり。此松の下陰に源大夫といふ者の家あり。其父をも源大夫といひしが、貧にして田地もなく又病氣にして働きもはかしくしからず。一とせ凶年にて源大夫少しばかり残りし田地家財もうり尽し、今はせんかたなくなりしに、或夜白髪の老人来りて暫く宿からんことをこふ。源大夫まづしけれども老人なれば、いたはしくおもひて心やすく宿かし奉れば、老人大に喜びてかならず厚く礼いふべしとて一間のうちへ入て臥けるが、翌朝源大夫起て一間をみれば、老人は居ずして只つるの毛の

少しばかりふとんにつき居たり。源大夫ふしぎにおもひて老人を呼びければ、庭の松が枝につるの声したり。戸を開てみるに鶴二羽松の梢にはや巢をばいとなみけり。是より日々見物の人群襲うしければ、源大夫は茶屋をはじめて一年の内にした、かの金銀を得たりける。今にうとくにくらしたり。呉しきこともあるものなり。

本妻の霊

能登の国羽喰のちに小金山といふ在所あり。又六といふものあり。有徳にくらしけるが、ふと下の女に目をかけしに本妻は貞実なるものにて少も妬む気色なかりけるに、かの下女、旦那の寵愛を鼻にかけ、少しくおのれが気に入らざることあれば、怒りをなし本妻を悪口し、又六少し本妻をひけば、下女は器なうち碎き、或はいそがしき日を見かけて頭痛といつはり部屋へ入て出ることなし。すべて悪人は善人よりも利口に立まはりて用にも立ものなれば、又六も下女が悪心は知ながら、用事を弁ずる発明にまよひて、しかりいましむることなければ、家内をばおのれがおもふまゝに制して終に本妻をば隠居させんはかりごとをめぐらし、おのれが衣服を鉄にて所々きりておき、扨旦那の機嫌を伺ひいつにかはりて涙

をながし、是まで御恩をかけしこと、死ても忘れまじ。ござんじさま／＼御家のせわをいたし候へども、御氣に入候はねば、御いとま給はるべし。尼法師にもなり候半といへば、又六あきれて是は何事のありてか、俄に斯はいふぞといへども、只々御いとまだに下されなば、外にいふべき子細は候はずと泣かこちければ、又六弥子細を聞たくなり、再三問ける後に、彼衣服をもち来て是は何の御うらみありてか如此し給ふぞといふ。又六是本妻のしはざならんと覺りて大に怒り既に本妻を逐出さんとせしを、下女泣てとゞめ何としてあなたのはざなるべきぞ。もし追出し給はゞ我も一所に追出し給へといふて留めしかば、又六いよ／＼下女を信じ、是よりして本妻同然にあしらひける。本妻はおもはぬむじつをうけ、是より病となりて程なく大切になりければ、下女は悦び、いか様悪のむくひははやく物なりなどいふて、下の男どもと物語りけるを、本妻聞いていよ／＼うらみ、はをくひしぱり、身を振はして死たりける。さて沐浴などして棺に入れ且那寺を招きて葬礼のいとなみをしけるに、夜半の頃より人も寝入、只旦那坊主のみかんぎんして、未だ寝ざりしが、棺の内よりめき／＼声して忽ち雷のおちたるが如きおとしければ、みな／＼驚きおきあがりて、みなに死たる本妻目をいからし口に女の



も心を改んなれば、跡の事に心を留めず、往生せよといへば、くわへたる首をおとし、泣をはらく／＼とながして、がつくりと坐したりけり。それより後、又六は外の女に目をかけず、俗人なれば日々念仏など唱て一生を過しけるとぞ。

生首をくわへて、棺の内
に立たりければ、みなお
それて一人も残らず逃
たり。檀那坊主は役目な
れば、泣／＼又六と二人
傍によりて、みなに彼下
女の首をくわへて、いか
れるまなこさもすさまじ
く髪さか立て鬼女【挿絵】
の如し。又六もおそれを
なし、あやまつたり。彼
が命をとりたらば、子供
に氣遣ふことはなし。我

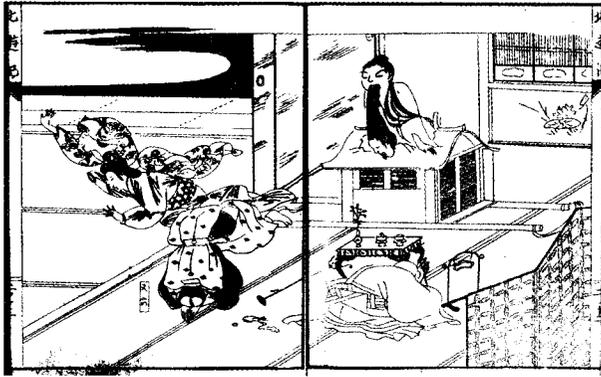
犬の恋慕

同じき国の西辺さいへんに習居村ならいといふ所あり。家数千四五百もありて町づくり一町くゝに又町名あり。其石橋町に大和屋伊右衛門俊家とて名高き能書あり。一人の娘をもちけるに容顔美麗ようがんびれいにして心も優にやさしければ、或る長者より嫁に囃もはんと媒人まいたちを以て言入いれけるに、一門中も相談さだんし仕合なることなりと縁組の相談既に極きはまりて、吉日を択て結納など取かはしける。然に此家に畜かひたる犬、結納たのみの入り日より食をたちて只寝るばかり。ありき廻まることもなくして臥けり。初は人も知らざりしが、後には薬となるべきものを食しむれどもねぶりにて薬はくすりず。娘がなぶる物をば食ふによりて、夫よりやはり娘に食事を与へさせれば、犬悦びて食ひ、平日のごとし。ありきまはりて病たる気はなし。さて縁組の日限にちぎんも来れば、花やかに粧ひ候て嫁入けるが、犬は其日より又臥て物くわず、うつらくとねぶり居たり。嫁入よめいりの日より娘もまた何となく不食し頭痛して、終に床とこにつきて労咳の病となり、折り薬れど其しるし露ばかりもなく、是もまたうつらくと寝ねぶりにて日を過しければ、母親も大に学まなび、我内わがうちへつれこして療治を加んと、消入くごとき娘をつれこしければ、我内へ帰る日より気色も勝すぐれ、食をも平生のごとくにして快くなりしが、此家の犬も娘

が帰りし日より、さすが嬉しそふに走りまはり、食すること平生のごとし。隣あたりの人これを見て、賤いやしき町人のならひなれば、大和屋の娘は犬と密通みつつうしたるならんといひ出し、町中の沙汰となりければ、聾もも今は面目なくして縁をきりて離別しけり。人の噂も七十五日なれば、取とりたも止とまれば、又或る長者へ囃もはれて再びかど火をたきけるが、此夫又前のごとくに病て臥し、娘もまた病出して此家をもまた離別しけり。母親も今はせんかたなく世間せけんの手前も面目なければ、さまざまに祈念をなし、又卜筮者にうらなわせて、其いはれいかなる事ぞと問ふに、皆是其母親の事をおろそかにするにぞおこりける。娘おさなきころに、便をさせせる折節、掃除そうじの費ひまをいとひ飼かる犬に此糞ぼをくふほどならば、此子を嫁よめにせんといひけるが、後には犬を呼ぶむこよくと呼しが、無智むちの犬なれどもさすが月の重れば、言ことも通じてかくはなりゆくとなん。さて久からで娘も死に、なれば犬も次第によはりて死す。女のあだし言はいはぬものところ。おそるべし。

孝行の소가ね

同じ国の籠尾かごをといふ所に鉄之助とて、父母に孝行かうかうなるものあり。貧しけれども人に慈悲じひ深く上を敬ひ友を愛し人より無理



なることをい、かけられても争ふことなく貧にしてやつくしくくれば、女房連もたず、家業を承りなくつとめて両親を養けるが、或とき隣村より帰るさ、一人の女に逢ひうちつれ立て帰りけるに、女いふやふは、自らは上方の者なり。ゆへあつて此国へ流浪したり。何とぞ夫婦になりて給らば、共にかんくをしのぎて親達をも心易く養ひ奉らんといふ。鉄之助は孝人なれば「挿絵」忝き志なれども、父母に伺はざれば、夫婦の縁は結びがたしといへば、しからば今宵一夜宿貸

し給へ。共々にうかゞひ候半と鉄之助が家に来りて両親に宿をかり、さて夜にも入れば、しかぐのよし両親へ伺ひけれども、知らぬ女の俄に嫁とならんといふは若は悪者の手引ならんも知れねば、両親も承引せず、夜も明ければ、所の庄屋より他国者の宿すること、堅く叶はざるよし、此

風聞をき、てきつといひ付ければ、女も本意なげに見へて暇乞し立出んとしけるが、鉄之助に向てお身様は善人なり。たとへ今貧苦にくらし給ふとも後にはかならず繁昌し給はん。心やすく暮し給へと名残おしげに見返りて門へ出けるが、沈むが如く土の中へ入たり。鉄之助不思議におもひ両親に斯といへば、両親も戸のすきより見たり、いか様此庭に古き墓など有て其亡魂の出たるならんと評議して、何さま入たる所の土をほりて若しはかならば外へ移さんとて親子此庭土をほりけるに二尺ばかりにして一つの壺あり。扱こそ墓なりけりと堀出しけるに、其重きこと大石を挙るが如し。其内をみるに、白かねを積たり。父子の者あきれはて、さては天より我々に賜へるものならんと喜びあいて、扱内へかき入けるに、外より見たる者ありて羨やましくおもひ庄屋へ訴へ、公儀へ奉らんとひしめきければ、鉄之助いかにも人々の仰にしたがはんと少しも惜む気はなく、ければ、庄屋も羨たく見、まづ我家に預らんといふによりて、かきて庄屋の土蔵に入れおき、鉄之助は帰りけり。其夜、庄屋の家しんどふして何となく恐ろしくなり、いなづまのごときもの家内の目先にちらづきければ、終夜寝ることならず。庄屋恐れをなしてかのかねを鉄之助が方へ返すべしとおもひ、夜の明るをまちかけ土蔵へ入

てかのかめをみるに空なり。かね少しもなければ忙然として迷惑し、万一鉄之助がねだりなば、盗人の罪のがれじと直に鉄之助が方へゆき、しかくのよし物語り、言訳もなき次第、あやまり入てければ、鉄之助は痛み入、少しも御うらみ申すじはなきに、御念入たることなりといひて丁寧にあしらいければ、庄屋も喜び内へかへり、彼空壺を鉄之助が方へぞ返しける。さて此風聞高くなり、訴し者と庄屋と彼かねを盗たりと専らいひふらしければ、人も誠ならんと疑ひける。然るに鉄之助は是より評判よくなりて、人よりあわれみふかく何となく金銀自由になり、後には村一番の富をなし女房をも大福長者よりよびうけ、弥さかへて今に至て子孫繁昌なりと、国の人みなこれを美談して孝行なるもの多しとぞ。天の恵あれば人より邪魔しても邪魔とならず、邪魔する者は返つて天罰をかふむり人にも疑はるゝ。恐しきもの也。

北遊記第巻二

西川貞助が事

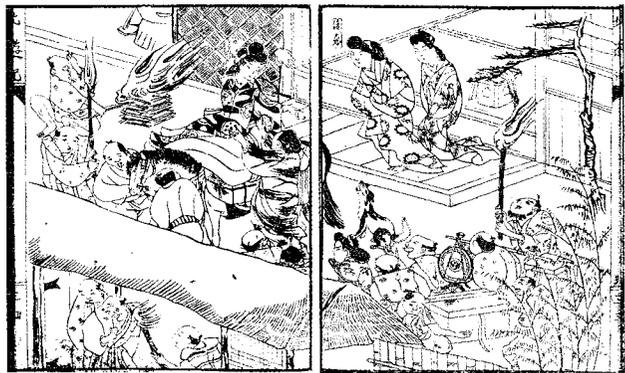
西川貞助といへるは、能登の国和田の浜といへる所の人なり。代々医を業として繁昌なりしが、貞助よく父母に離れ家も次第に貧しくなりけるにぞ。京へ登りて医学を修行せんと家屋敷までもうりしろなして道中の入用銀とし、なれし山川をはなれて出けるが、越前の国に至るころ、日暮て途を失ひ広き野原にさまよひけるに、はるかに人の足おとするを聞て、ものとはんと声をかけ、れば、其人近く来る。既に近きみれば、五十ばかりの女なり。主人に急病人ありて是より三里ばかり外医を呼に参るものなりといふ。貞助この者こそ能き宿の主なりとおもひ、急病人に今三里も外へ医を迎に行れんよりは某に一夜の宿を借し給へ。某は西川貞助といふ外科本道を兼たる医者なりといふ。女聞てそれこそ幸ひなり。いざ、せ給へと案内しければ、貞助は悦びて扱一里ばかり行ければ、家里あり。大なる屋敷の門に至り、しばらく待給へ。内へ案内せんと、女は門に入れば、貞助は脚半など解て衣紋を繕ひ待居たり。姑くありて彼女出て内へ伴ひ玄關へ請じけるに、主の女出迎ひて内へ伴ひ入る。其歳ばい四十ばかり。着たる所のはみな龍を画ける錦なり。二夕間入てそ

れより廊下をつたひはるか奥のかたへ行はば、小門あり。門を入ば、三重のたかどのあり。其内へ入ば、こしもの如きもの六七人、膳をはこび、席を設けてこゝにて饗応す。主の女、貞助に一礼し、扱ふしぎに御入下されしこと、大慶の至りなり。姫が急病心元なく侍へば、何とぞ診察下さるべしといふて彼高どの、二重へ伴ひければ、十五六の娘しとねの上に臥し、二人のこしもと傍に侍れり。貞助ねごろに診察し、丸薬を与へて扱下へくだりければ、種々の酒さかなを出してもてなすこと、親につかふるが如し。夜も更ければ、又小門を出て廊下より客座敷へ行。ふたりのこしもとを右左に寝させて足こしを揉み、つかれを休めて、臥ける。夜明てみれば、茫茫たる野原に臥たり。驚きてあたりを見まはすに、人かげもなく唯鼯の二つ三つ其辺を走りありくをぞ見たりける。狐の欺きけるや、又は余のもの、欺きけるにや、しるべからずとぞ。

阿弥陀峠

同じき国に阿弥陀峠といふ所あり。むかし此所の人死ればみな此所へ棺をもち来り、念仏など唱ふれば、忽ち三尊の弥陀来迎ありて、棺を空中へもたげ歸り給ふによりて阿弥陀峠と

は名づけたりとぞ。或る獺師の死たるとき、例によりて僧を招き、此峠にて引導せしに、忽ち空中にくわんげんの音きこへて、五色の雲たなびきくどり、三尊の弥陀ありくと来迎し給へば、一族親類かなしみを忘れ唱仰し奉りけるに、其子何某といへるもの、何おもひけん、急ぎ沓里歸りて弓矢をとり来り、中尊のむねのあたりをねらひ、きつと放しければ、忽しんどう悔冥し【挿絵】姿は消て失にける。皆々これは狂氣したるかど大にしかり罵りければ、彼男いふやふ、只今射たるは弥陀には非ず。某窺ひみるに三尊ともに耳動きて折々舌を出せり。是必ず畜生ならん。故に射たりといふ。さて捨もおかれぬことなれば、山を穿て埋めんと穴を堀けるが、死人のうでかふべなどの骨幾らともなく出けるにぞ。ふしぎにおもひ、所を



替へて掘べしと其辺りを扱ひけるに、一つの穴あり。穴の口に幾千年経たりともしれぬ古狸、胸のあたりを射ぬかれて、死居たり。人々は是を見て初て驚き、これより此所へ死人を捨ることなしとぞ。

蛇含草

同じ国羽飲の七郎右衛門といふ人身代よく、さて医に妙なり。其療治まづ病の根本を求て、あやしき絹に包たるものにて、撫ればいかなる年久しき病にても一兩度にて治せずといふことなし。其辺りの人のいへる、七郎右衛門若き時、玉子問屋なりしが、夏の頃になれば夜々卵を盗むものあり。七郎右衛門さまぐゝ氣を付けるに、或夜三尺ばかりの蛇、梁の上より来て卵の箱をおしわけ、十四五ばかり吞て帰りけり。七郎右衛門怒て明日木を削りて卵の如にし、三四十ばかり卵箱の上に入置。さて夜に入て如何するぞと伺ひ見けるに、果して蛇又来て吞こと、前夜の如し。如何するぞとみるに、外へ出て石垣の内へ入んとして木の卵消されば、身をもみけるが、それより庭の内を這まはり何やら求める躰なり。程なく一本の草に尋あたり、これを喰へて彼卵の所をなでねぶり、終に其草を吞たりしが、忽木の卵消て平生の腹の如く細り、石垣へ

入ける。七郎右衛門あやしくおもひ、彼草をとりおきて食傷などしたる人の胃のあたりを撫るに立所に効あり。夫より万の病を療治するに、手に随て療ずといふことなしとぞ。彼草は蛇含草といふよし。

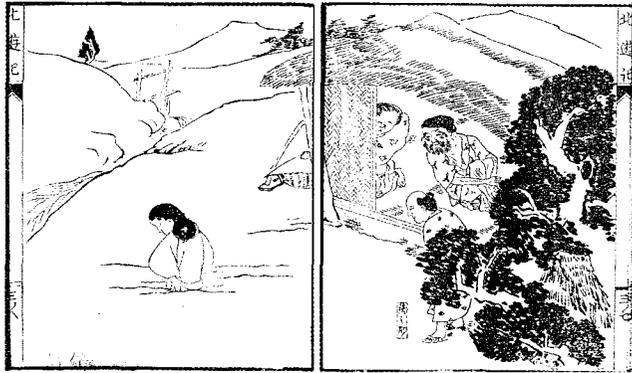
川中の温泉

加州小松の城下を去こと三里ばかり、平嶋といふ所の川中に温泉あり。其三四年前のことなりしが、平嶋へ一人の老翁来りて住す。歳百二十八とかや。常に三四十ばかりの人の如し。能人相見て、人の吉凶をいふこと、神の如し。又料物をとらざれば、人皆敬ひ尊みて仙人なりといふ。或とき風呂をたきて翁をまねぎければ、翁喜びゆきて湯に入けるに、釜に足をあて、大に驚へ飛上りしが、おぼへず本性をあらはして狐となり、三声啼て飛出、行かたしれずなりにけり。扱里人も興をさまして狐の靈なることに感じけるが、四五日経て老翁又来りければ、村人且おそれ且喜び人相を我もくとたのみけるに老翁かぶりふり、これは無益のことなり。我今又来るは里人に有益のことをしめさん為なり。此川中に温泉あり。其効能は諸国の温泉に勝れたり。はやく川を外へ転じて温泉に人を療じなば、此さと有人かぎり繁昌すべしといひて消うせ

けり。里人さらばとて川を吟味しけるに、果して温泉あり。しかれども川の転ずべきやうもなければ、其儘にうち捨けるとぞ。余ゆきてこゝろみしに、いかにも霊泉なり。おしきことにてぞある。

占太郎兵衛

同じき国大江といふ所に太郎兵衛といへるものあり。占ひに妙を得たり。此人の占ひは算木籤など用ひず。只人のもちたるものを見て占ふに、百に一つもちがふことなし。余もたちよりてけるに座に四五人並居たり。一人はなにかみを出して問ける【挿絵】に太郎兵衛いふには、此人常に貴人に愛せられて供にゆき、或は料理など頼まれ、或は給仕などして一生を送る人なり。去



ながら老年の後は用ひられず。甚困窮すべしといへり。其人手を打て奇妙がり、扱老年の困窮はいかなる故ぞ。手当やすべきと問けるに、イヤ／＼今貴人に用ひられ、可愛がるゝが即困窮をするの因縁なり。鼻紙は人のふところに入れて、平生はなさるゝことなし。然ども終には捨られて再び用らるゝことはなし。この道理なりといへり。又一人小判を出して問けるに、此人は貴人に用られて、目下のものにぞ、ねたまゝ生れなり。一生のうち苦労たへず、下へ向て望みごと叶はず。人のそしりを用心すべし。何となれば銀錢など少し多くなると、金にかへてとりおかんとするは、人の情なり。其ねらひねたまるゝことを知べしと、其人も感心して少しもちがひなしといへり。余も十二個を包みて占を乞ければ、何かあると問ふによりて、腰の矢立をとり出して、これを以て占ひ給へといふに、此人は十人のうち三四人に可愛がられ、望みたのまるゝ人にて又いらざるせわする人なり。まづ人のたのまぬことを引あつめて世の人に告知らせ、人の為にも非ず、又おのれが為にもせず、一生をうから／＼と暮す人なれども、たとへ火水の難に逢ても人に捨らるゝことなし。又立身も出来ぬ理あり。凡そ人、矢立を腰にさしては内に居るものに非ず。必ず余所へ行ものなり。故に旅人とみへたり。一生旅し

てよし。我内へ帰ると隠居のやうに引こもる人なりといへり。其物の理を見、情を察すること神の如し。奇なる人もあるものなり。

斬幽霊

同じ国の城下に十兵衛といへるものあり。江戸に行て三四年も奉公し、少し銀など貯へて故郷にかへり、一の商買にあり

つきけるが、此人江戸に居るうちに或る女と契りふかくかたらひけるに、故郷へ帰るころ、婦人は足手まどひなり。立身の妨ともならんとおもひ、其女に沙汰せずしてふり捨けるが、此女跡にてやうすを聞て、大に悲しみ終に病となりて半年ばかりも床に就けるに、男は加州におゐて商買に身をいれける程に「挿絵」半



年のうちにも利を得ること少からず。しかるによなく彼女来りて過こしかたのうらみをのべ、何とぞして江戸よりつれこし給はれといへるとも、男は狐などのたぶらかしけるなりとこゝろへ、少もとりあわざりしかども、後には恐しくなりて友達に斯と告げれば、是は弥野狐などのしはぎなるべし。氏神へ立願するにしくはなしといふによりて、氏神は勿論其外の神仏へさま／＼と祈請をこめけれども、更に其甲斐なし。因てはらを立、脇差を枕にして、若し来らば一とうちとおもひ定めて伏けるに、果してかの女又来りければ兼て覚悟したることなれば、ぬきうちいきりつけければ、アツといふこゑして形はうせにけり。それよりしてあやしきこともなかりけるが、或夜夢に彼女来りて、そなた様にはどうよくにも斯までおもひこがるゝものをよくも手にかけて給ふ物哉。これを参らせんとて髪をきりたるを与へける。夢さめてみれば、髪を握りたり。あまりふしぎのことにもおもひ、又おそろしくおもひて、夫より江戸に行、かの女を尋けるに、かの幽霊をきりたる夜ぞ、はかなく消けり。さて男は悲しみにたへず、寺へ願ひてかの女のはかをあばき見るに、其すがた生るが如くにして大げさに斬はなし、髪はもとよりきりたれば、いよくあるにもあられず、かの寺にて剃髪し跡をねんごろにと

ぶらひける。

右、日々坊享保日記、北陸杖の跡に載たる事跡、今あらためて梓にちりみむ。末の巻は余が聞おけることを記し、合せて好画の人に告るものなり。

北遊記第四附録

尾形三郎が事

尾形三郎諸因と名乗りし勇士は、其初め豊後の国の人なり。此国に一人の寡婦あり。和歌の道に達して、殊に名高く其外から国の文にも達し、優にやさしければ、雲の上人も聞おかれて、一とせ太宰府へ下向ありけるとき、某の大納言、彼寡婦のもとへ立より給ひけるに、道路甚さかしく人倫あるべうも見えぬ深山に入て、彼しこの岩かげ、この木の下にむぐらおふるやどの一軒づつありけり。田も陸田も荒果て猪鹿などの牀となるもあり。大内山を立出てかゝるおそろしき所へゆきかゝり給へば、大納言ものうくやおぼしけん

光りなき谷の木の葉のうづもれてありともみえぬしき嶋の道

と詠じ給ひ彼寡婦許に入給ひて此歌を示し給ひければ、寡婦

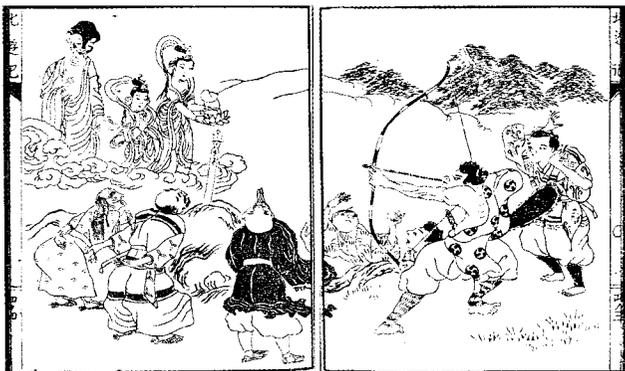
とりあへず、

おほ君の道あればこそしら雲のかゝるみやまに生ふる民くさ

とよみて奉りければ、大納言恥入給ひけるとぞ。此寡婦ひとりあり。桂となん名つけゝる。此むすめ又和漢の書に達し、十三歳の時とかや、五言のからうたをよみける。

逸矣瑤池会神仙其奈何虚哦白雲曲草木共嗟駝

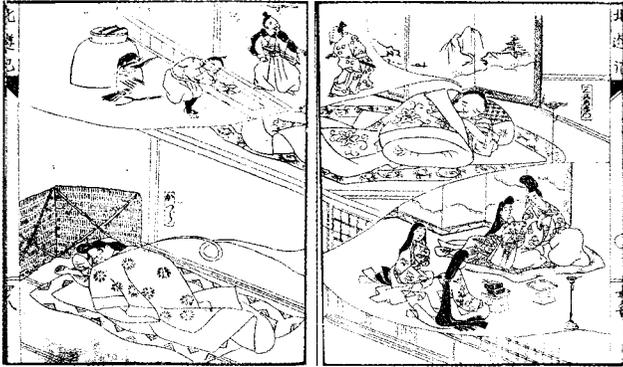
とかや賦しける。是より母も其凡人ならぬことを知て、我子ながらも朝夕敬ひける。しかるに山賤のならひ、禽獸の心のみにして物のあはれを知る人もなければ、詩歌を詠じ、書などひぼとくを見ては、誠に狂人のごとくにおもひ、欲なき人からを見てはおろかなるものにつけこみて、其田宅を奪ひとらんとばかり



けるほどに、あなたへ欺き、こなたへあなどり、終には其たのみける生業の本をあやうくしぬ。桂はこれを悲しみて自ら其村の富たる人三五左衛門といへる人のもとへみやづかへして、母を養ひけるに、此三五左衛門、おもてはうつくしき男なれども、内心は山椒大夫にまさらんほどの強欲無道の男にて、殊に邪智ふかく、人をつかひ人を欺くこと甚巧なれば、此家につかふる者、粉骨して力を尽ても其心に叶ふ程に行届くものなかりけり。桂は殊に古への紫・赤染などの道を慕、優にやさしく生れたれば、猶更に苦しみふかく堪がたくみえけり。されば虎狼も其情にほだされ、陰陽の道にまよふことはり、三五左衛門、桂が色に心を奪はれ、さまざまと口説けれど、桂は堅くまもりて難面くあしらひければ、三五左衛門、弥無念におもひせめつかふ【挿絵】こといよく、甚しかりければ、三五日の内には桂は喙なんとおもはざる人はなかりけり。しかるに桂、夜の夢に美麗なる男子一人来りていふ様は、此程主のせめつかひ、さだめて苦しくも思ふらん。我久しくおもひをかけ、れども、おことは道を守れることの出たく聞ふるにぞ、あへて斯とは告ざりけり。今は其命のたへなんことのいたわしく出来りてわが心を明すのみと。桂も其ことばのうれしさに、いなむ心の出かねて比翼のちぎりをぞ

結びける。さてこれより夜ごとの夢にかの男と大福長者の住居をなし、数十人の家来をつかひ、楽しきこといふばかりなし。さむれば、苦しき三五左衛門がどうよくも、寝ればかわる世の有様に、昼の苦しみをば忘れける。扱三五左衛門は程なく病つきて夜は殊に苦しき声を出してあやしきことをのみい、ける。医者其病症を審にするに三五左衛門夜毎に夢に人の家来となりて身になれざる下ぎまのはたらきして苦しきこといふばかりなし。夢さむれば、惣身あせを発し、夢中の苦役に草臥て昼は、うつ、となく魂ぬけたる人の如し。実や世のなかのうきしづみは誠に波のうち、息の出入が如く常住榮花に過さんとおもふはおろかなる人の心なり。去程に三五左衛門は病気の床にも桂の恋の叶はざるをむねんにおもひ、何ともして人しれず桂を殺しうつぶんをはらさんとおもひ、其支度をぞ企ける。桂は夜なく、榮花の身となり、夫の容貌心はへより金銀衣食一つとして心に叶はざることなれども、さめては常にせめつかはれ天人の五衰今爰にあはれることゝもなり。さるにても此おとこ、夜ごとの夢にはみへて、はかなくも昼をば何とうば玉の夢がさむるか、覚るが夢か、いかにもして正しみんと、ある夜の夢におだまきのいとはしに針をさし、おとこのうは着にさしおきけるが、ふし

ぎなる哉、夢にはあらざりしが、かのおだまきのいとをひきて帰(かへ)りける。桂(かき)さめて目(め)あやしみ且(かつ)うれしく彼(か)いとを追(おひ)て行(ゆ)けるに後(うしろ)なる山の洞(ほら)の中(うち)へぞ入(い)りたりけり。桂(かき)は洞(ほら)の口(くち)にイ(い)みて、おそろしや、いかなるものが住(す)まんと窺(うかが)ひみるに、奥(おく)より十五六(じゅうごろう)の小童(わらわ)誠(まこと)に玉(たま)の如(ごと)なるが出来(でき)りて、まづくこなたへ来(き)り給(たま)へといふに、恐(おそ)しながらうちつれて入(い)ければ、およそ一丁(いちぢょう)ばかりにして忽(こつぜん)然(ぜん)として別(べつ)乾(けん)坤(こん)ひらけ山河(さんか)の靈(れい)秀(しゅう)、宮殿(きやうでん)の崇(さう)高(かう)、心(こころ)も詞(ことば)もおよびれず。これぞ御身(おんみ)のやかたなりと教(おし)にまかせ入(い)てみれば、二十五六(じゅうごろう)の美男子(びなんし)病(やまひ)に臥(ふ)て、玉(たま)の床(とこ)にあり。桂(かき)が入(い)をみて顔(かほ)をふりあぐれば、実(じつ)にも夢(ゆめ)の内に契(ちぎ)りしおとこにぞありける。これが誠(まこと)の夢(ゆめ)なるか、夜毎(よごと)の夢(ゆめ)が夢(ゆめ)なるかと、桂(かき)はなみだにむせびてとりすがりければ、男(おとこ)も両眼(りやうがん)になみだ



を催(もよほ)し、今生(こんじやう)にてはもはや逢(あ)ふこと叶(かな)ふまじとおもひけるに、よくこそ尋(たづ)ね来(き)り給(たま)へるもの哉。夜前(やぜん)おことがさしたる針(はり)は誠(まこと)の針(はり)にはあらねども、女(に)心の一筋(いちすぢ)に、かくとおもひし一念(一念)が、鉄(てつ)よりかたきわが身にたち、終(つひ)に命(いのち)を失(うしな)ふぞや。我(われ)は人には非(ひ)ず。此洞(このほら)に千余年(せんねん)ふる大蛇(おほいぢや)なり。非道(ひだう)の色(いろ)に身(み)を化(け)して同類(どうるい)ならぬおことを慕(した)ひし。天帝(てんてい)の御(のみ)とがめに、おことが恋慕(こいぼ)の一念(一念)にて、我身(わがみ)を殺(ころ)すは因縁(いんえん)の通(とほ)れざる所(ところ)なり。さりながら【挿絵】おことが腹(はら)にわが種(たね)を宿(やど)したり。生(なま)れ出て人(ひと)ならば、あつばれ天下(てんか)に名(な)をふるわん勇猛(ゆうもう)の士(し)となるべし。能(よ)々(よ)おしへて生(せい)長(ちやう)させ給(たま)はれと懇(こころ)にい、ければ、桂(かき)は一所(いしょ)に死(した)たさの涙(なみだ)は血(ち)しほの如(ごと)なり。男(おとこ)ふでをとりて子(こ)を教(おし)めるの條(ぢょう)々(ぢょう)を書(か)け付(け)付、

さきのよのためしも今の種(たね)となりむすべる契(ちぎ)り後(のち)にしるべし

とかきて女(に)にあたへ其身(そのみ)はいかなるけしきにて空(そら)うちながめしが、さすがわかれをおしくや思(おも)ひけん貞女(ていじよ)両夫(りやうぶ)にまみえずとは、しんせうのことなりし。身(み)は玉(たま)の緒(いと)のたえて光(ひかり)なきものをいかにせんとて

いひおかんかたみも空(そら)の中(なか)にあとなきほどを何(なに)と見るべき



と書おはつて、桂に与へ、
 さておことに心をかけた
 る三五左衛門は、人の世
 を永くすごすべき身にし
 あらざれば、彼がいのち
 はこなたに申請たれば、
 かえり見給へ。からだに
 のこるべきにもあらず。
 我は

うどん花の咲べき匂
 ひ香にふれて袖と
 くゝをまたやつら
 ねん

といへば【挿絵】桂はいよくはなれがたくみへければ、男
 空中にむかつて気を咄ければ、忽ち雷電振動し、空より黒雲
 まひさがり、咫尺もわかず、まつくろに成ければ、今迄美男
 と見へし夫、忽ち本性あらはれて、幾丈とも知れぬ大蛇とな
 り、雲間に入て失ければ、玉のいらかど見へけるも岩窟の苔
 むして、さもすさまじき気色なり。桂はせんかたなくも家に
 帰りければ、はや三五左衛門は雷にうたれて死たりけり。桂

はこれより道を守り、母の許にて其身も寡婦を守りけるに、
 程なく男子出生して力も強く心も明かに、三歳の頃には、父
 が書おきけることをそらんじ何となく武道に心をよせ、十歳
 の時には韜略の大意を知り、終に天下に名を成す大英雄とは
 なりける。其生れたる時、尻に尾ありけるを母親きり捨たり。
 其あと壮年の後まで有けるほどに、尾形三郎とは名乗けり。
 又風雅にもありけり。秋の日、友どちの尋こしける歌、返しに
 さもあらばあれとおもへど秋の暮は何につけても心う

哉

其刀の銘に

方寸之氣却敵千里況斯青龍何難折衝

など後の世伝へて南北朝の頃までは武士の賞言なりしとかや。
 其後たへて知ものなし。余郷里に古書多き家あり。少年のみ
 ぎり、その家にゆきかひて閑なる日、かりて写し置ぬ。

寛政九_二年

正月

江戸書林 橋本忠蔵